

しわす なか
師走も半ばとなりますと、年末の大掃除の時期がやってまいります。このごろでは自動で床の埃^{ほこり}を取ってくれるロボットがあるようですが、さすがに大掃除ともなりますと、自ら^{ほうき} 箒や雑巾^はで掃いたり拭いたり、普段は掃除しない所まで綺麗^{きれい}に清めて、気持ち良く新年を迎えられるようにしたいものです。

仏教では、掃除は修行^{たと}に喩えられて来ました。

その昔、お釈迦さまの時代に、掃除をしながら真実の教えに目覚めたお坊さんがいました。「シュリハンドク」というその方は、お兄さんに誘われて^{ぶつでし} 仏弟子となったものの物覚えが大変悪く、一つの教えを四ヶ月かけても憶えられず、更には自分の名前さえ忘れてしまう有様^{ありさま}でした。遂には修行を諦^{あきら}めかけたその時に、お釈迦さまから一枚の布を与えられ、「塵^{ちり}や垢^{あか}を除くように」と唱えながら掃除に励んだところ、お悟りを得るまでになったといわれています。ひたすら素直に、心の中まで綺麗^{みが}に磨き清めたことで、迷いを離れて真実の教えを見定めることができたのでしよう。

もう一つ、^{くだ} 下って中国は唐の時代、^{とう} 達磨大師から数えて五代目の大^{だるまだいし} 満弘忍^{だいまんこうにん} 禅師のもとで修行をされた神^{じんしゅう} 秀というお坊さんがつくられた漢詩に、
「時々^{じじ}に勤めて^{つと} 払^{ふっしょく} 拭^{じんあい}し、塵埃^あ 有らしむること^{なか} 莫れ」
というものがあります。

この詩は、お茶席の床の間の掛け物に良く用いられる禅語で、「時々、床の間を埃の無いように掃除しなさい」という意味かといえはそうでは無く、「いつも心に油断なく修行に励まなければならない」という^{ふだん} 不断の^{かくご} 覚悟を示した言葉だといわれます。

禅宗では、日常の掃除を「作務^{さむ}」と呼び、^{すわ} 坐って足を組む「坐禅」と同じような心掛けを持って励むことから「動く坐禅」と捉^{とら}えています。そして、内面の心を調べ清らかにする修行も、作務、掃除に喩えられてきたのです。

この一年、振り返れば確かに色々な大きな出来事がありました。しかし、これから新年を迎えるにあたっての大掃除をする前には、もやもやした心の荷物はひとまず降ろし気持ちに区切りを付けて、さあ掃除をするぞと気持ち^{ふる}を奮い立たせ、身も心も軽くなったところで自己の内面も綺麗に磨き清めるような心掛けで、来年に向

けての大掃除に励みましょう。

それがそのまま仏道修行となるのです。

— 終 —